

シンポジウム 狩野家絵師の多様な仕事

—日本の絵師、狩野家の活動の多彩さを従来の枠組みにとらわれずに探り、
近代以前の「絵」の豊かさについて考える—



2006年10月21日（土）午前10時～午後5時
武蔵野美術大学1号館103教室
協力：『古画備考』科研研究会

プログラム（時間帯は変更される可能性があります）

10：00 受付

10：30 全体テーマの説明、事務連絡等 玉蟲敏子(武蔵野美術大学)

【午前の部】司会 畑靖紀(九州国立博物館)

鈴木希帆(武蔵野美術大学教務課)

10：40 並木誠士(京都工芸繊維大学)「16世紀：狩野家の多様な活動」

11：20 五十嵐公一(兵庫県立歴史博物館)「17世紀：京狩野と江戸狩野」

【昼食】12：00（学内の食堂も営業しております。裏面の地図をご参照ください）

*13：00～13：15展示室にてギャラリー・トーク

小野寺玲子(武蔵野美術大学美術資料図書館)

【午後の部】司会 吉田恵理(城西国際大学水田美術館)

鈴木希帆(武蔵野美術大学教務課)

13：20 野口剛(京都文化博物館)「18世紀前半：京都における鶴沢派の活動」

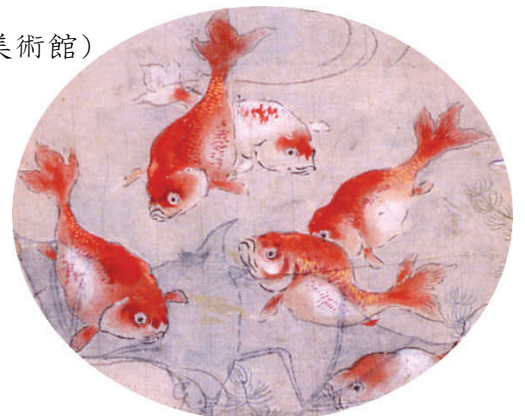
14：00 田島達也(京都市立芸術大学)「18世紀後半：円山派と御用」

14：40 玉蟲敏子(武蔵野美術大学)「19世紀前半：木挽町狩野家の文化的活動」

【休憩】15：20

【討議】司会 相澤正彦(成城大学)

15：40～17：00 コメンテーター 安村敏信(板橋区立美術館)





【パネリスト】

並木誠士（京都工芸繊維大学大学院・工芸科学研究科・教授）「16世紀：狩野家の多様な活動」

狩野派の初代正信（1434-1530）の登場は、寛正4年（1463）の雲頂院壁画制作に関する記録である。以後の正信の作画範囲は、障壁画、肖像画を中心とする。足利義尚像（地蔵院）は、義尚の母で、8代將軍義政夫人の日野富子の依頼で制作された。正信は義政夫妻の肖像画も制作をしており、正信がその地位を確立したのは、これらの肖像画制作がひとつの契機であったことが推測できる。元信（1477-1559）の登場は、1513年の大仙院障壁画制作と鞍馬蓋寺縁起絵巻の制作である。絵巻制作は、正信には見られず、元信の切り開いた新境地である可能性がある。元信の代になり制作されるジャンルに、金地着色の花鳥図屏風がある。また、当世風俗の積極的な取り込みも、元信の選択した新しい方向性である。このような新ジャンルへの関与は、新しい注文主と受容者の獲得がもたらされる。つまり、ジャンルの拡張とパトロン、受容者の拡張が元信の大きな特徴であり、それが狩野派の多様な仕事の基礎を作っているのである。

< 著作・論文 >

「妙顕寺本文殊普賢菩薩像について」『デザイン理論』42号、意匠学会、2003年

「酒飯論絵巻と狩野元信」『美術史』137号、1995年

「狩野正信の肖像画制作について—地蔵院蔵騎馬武者像をめぐる—」『瓜生』13号、1991年

五十嵐公一（兵庫県立歴史博物館・学芸員）「17世紀：京狩野と江戸狩野」

京狩野家と江戸狩野家の関係は、どのように理解したら良いのだろうか。狩野探幽は江戸狩野家一門の総力を結集し、寛永、承応、寛文の三度の京都御所造営の仕事を行っている。そのうち、承応度と寛文度の京都御所造営に京狩野家当主・狩野永納が参加している。これと同じような事例がもう一つある。京都・泉涌寺の再興にあたり、探幽はその全ての絵画を描くよう命を受けている。そして、ここでも永納が仕事を手伝っている。このように、探幽のもとで永納が幾度か仕事をしたことは間違いない。ところが、探幽と永納に深い関係があったという記録が確認できない。例えば、鳳林承章の日記『隔莫記』に探幽が頻りに登場することが知られているが、それらの記録から探幽と永納の関係が見えてこないのである。近年、京狩野家に関する多くの記録が集積されつつある。これらの記録に注目しながら、京狩野家と江戸狩野家の関係について考えたい。

< 著作・論文 >

『狩野永納展図録』兵庫県立歴史博物館、1999年

「狩野山楽と山雪の助命」『美術史論叢』20号、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部美術史研究室、2004年

「九条幸家と京狩野家」『塵界』17号、兵庫県立歴史博物館、2006年

野口剛（京都文化博物館・学芸員）「18世紀前半：京都における鶴沢派の活動」

日本絵画史において18世紀の京都というと、円山応挙や池大雅、伊藤若冲など、それまでにない画風を確立した画家たちが群雄割拠した世紀の後半を思い浮かべる。しかし近年、その前史をかたちづかったであろう世紀の前半についても光が当てられつつある。狩野探幽に学んだ鶴沢探山とその子・探鯨も、この時代の京都で活躍した画家である。とはいえ、現在では鶴沢派という流派の名さえ耳にしたことがないというのが一般だろう。そこで、まずは、京都における知られざる鶴沢派の活動のあらましを紹介し、ついで、探鯨の門人が師から教授された事柄を描きまとめたと考えられる巻物を通じて鶴沢派の有していた先駆性、ことに、後の日本の絵画に多大な影響を及ぼした応挙との関わりについて述べ、鶴沢派の存在をアピールしたい。

< 著作・論文 >

「鶴澤派研究序論」『朱雀』15集、京都文化博物館、2003年

「鶴澤探山の画歴—失われた御所障壁画—」『近世京都の狩野派展』京都文化博物館、2004年

「江戸中期・京都の狩野派における絵画学習」『朱雀』18集、京都文化博物館、2006年

田島達也（京都市立芸術大学・専任講師）「18世紀後半：円山派と御用」

御用絵師といえば狩野派の専売特許のような感があるが、京都ではそれ以外の画派でも、宮中・門跡・公家等の御用を勤めるケースは少なくなかった。農家の出身で、京に上り、写生画で人気絵師となった円山応挙も、その成功への過程には、宮廷周辺の御用があったことはしばしば指摘されている。応挙の「御用」の仕事内容には、狩野派同様、古画の模写もあった。応挙が写した銭舜举の絵が非常によくできたため、宝慶寺の蓮池院尼公なる人物が、その粉本を召したという話がある。応挙が自身の名の由来でもある銭舜举の作品を模写していたことは、複数の売り立て目録から知られている。本法寺に所蔵される銭舜举筆鶏頭図もその一つ。これを写した応挙の模写は、応挙だけでなく円山家にとっても象徴的な作品だったらしい。子孫にも写されて、4代目応立の模写が、最近武蔵美の所蔵となった。この作品を入口に、円山派と御用の問題を考えてみたい。↗

↓

< 著作・論文 >

「近世後期京都画壇の縮図—宮津市智源寺天井画」『朱雀』7集、1994年
「『平安人物志』を読む」『京の絵師は百花繚乱』京都文化博物館、1998年
「御所伝来の障壁画と狩野派」『近世京都の狩野派展』京都文化博物館、2004年

玉蟲敏子（武蔵野美術大学・造形学部・教授）「19世紀前半：木挽町狩野家の文化的活動」

かつて、橋本雅邦が若年期を述懐した「木挽町画所」（『国華』3号、1889年）以来、〈粉本主義〉とレタールが貼られ、弊害ばかりが強調されてきた江戸後期の江戸狩野家について、見直しの機運が起きてきたのは1970年代半ば以降である。本発表では、都市・江戸が空前の成熟期を迎えた19世紀前半を舞台に、入門者の側からのイメージではなく、時代のトップアーティストとして木挽町狩野家の養川院惟信、伊川院栄信、晴川院養信らを取り上げ、かれらが、御三卿、諸国の大名、また酒井抱一などの同時代の著名な絵師といかなる交流を繰り広げ、またいかなる画作に取り組んできたのか、その文化的な活動について注目してみたい。「月次景物図」（江戸東京博物館）、新出の「朝妻舟図」（個人）など具体的な作品を話題の中心に据え、王朝趣味、洒脱の世界、デザインかファインアートか、といった視点から分析することによって、新たな魅力が引き出されていくのではないかと。

< 著作・論文 >

『生きつづける光琳』吉川弘文館、2004年
『都市のなかの絵——酒井抱一の絵事とその遺響——』ブリュッケ、2004年
『講座日本美術史5 〈かざり〉と〈つくり〉の領分』（編著）、東大出版会、2005年



【司会】

畑靖紀（九州国立博物館・学芸部企画課特別展室・研究員）

< 著作・論文 >

「室町時代の南宋院体画に対する認識をめぐって—一足利將軍家の夏珪と梁楷の画卷を中心に—」『美術史』156冊、2004年
「雪舟筆四季山水図（石橋美術館別館）再考—図様の典拠と制作年代について—」『仏教芸術』82号、2005年
「文明十八年の大内氏と雪舟」『雪舟等楊—「雪舟への旅」展研究図録』山口県立美術館及び雪舟研究会編集・中央公論美術出版発行、2006年

吉田恵理（城西国際大学水田美術館・学芸員）

< 著作・論文 >

「日本『文人画』研究ノート 江戸中期の李漁（李笠翁）イメージに関する一考察」『学習院大学 人文科学論集 8』学習院大学大学院人文科学研究科、1999年
「江戸時代における青緑山水画受容の研究」『鹿島美術研究』年報第17号別冊、2000年
「池大雅筆『洞庭赤壁図巻』の表現と賞翫の場」『美術史』155号、2003年

相澤正彦（成城大学・文学部・芸術学科・教授）

< 著作・論文 >

『土佐光信』新潮日本美術文庫2、新潮社、1998年
『禅と天神』[共著]吉川弘文館、2000年
「芸阿弥画本の幻影—弟子祥啓の作品から」（板倉聖哲編）『講座日本美術史2 形態の伝承』東大出版会、2005年

【コメンテーター】

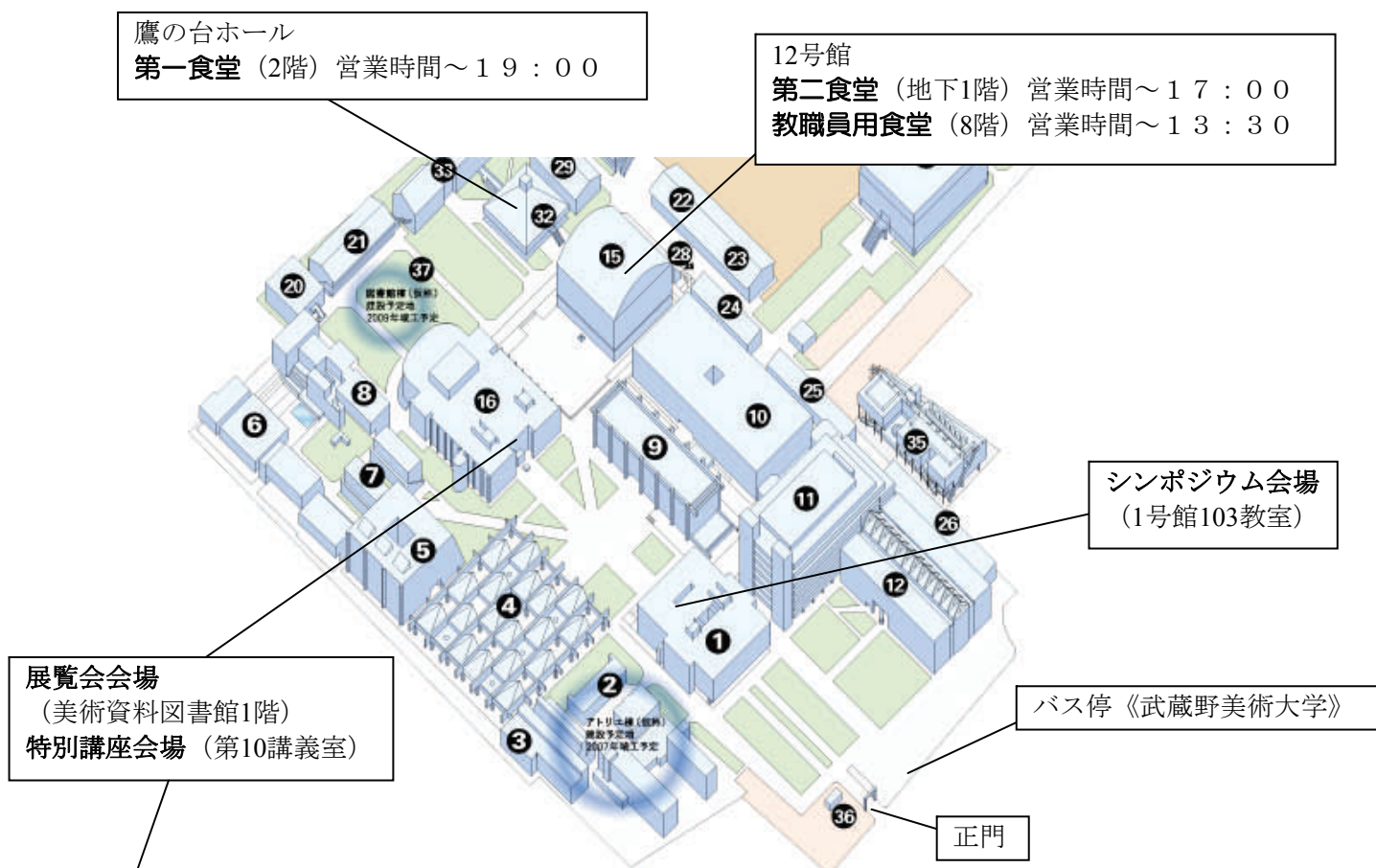
安村敏信（板橋区立美術館・館長）

< 著作・論文 >

『琳派美術館』[共編]集英社、1993年
『江戸名作画帖全集4 狩野派 探幽・守景・一蝶』駸々堂出版、1994年
『広重と歩こう 東海道五十三次』[共著]小学館アートセレクション、2004年
『狩野派決定版』[共著]別冊太陽日本のこころ131、平凡社、2004年



★武蔵野美術大学構内地図



★**展覧会「御用絵師の仕事と紀伊狩野家」**

*** 随時御覧いただけます**

期間 : 2006年10月16日 (月) ～11月11日 (土)

休館日 : 日曜・祭日 (10月29日は開館)

開館時間 : 午前9時～午後6時

(土曜および10月29日は午後5時まで) 入場無料

開催場所 : 武蔵野美術大学

美術資料図書館1階展示室

東京都小平市小川町1-736

電話042-342-6003

<http://www.musabi.ac.jp/library/index.html>

★**特別講座 狩野紘信氏**

(紀伊狩野家13代目当主・日本画家)

「紀伊狩野家に生れて」

日時 : 11月6日 (月) 午後4時半～

会場 : 武蔵野美術大学内 第10講義室

入場無料

★バス時刻表

停留所 武蔵野美術大学(むさしのびじゅつだいがく)

行き先 国分寺駅北入口

時 平日 土曜 日曜・祭日

10	07▼ 23 40 54▼	05 32▼ 59	05 32▼ 59
11	13▼ 32 51	26 47	26 47
12	10 25 44 53▼	07▼ 26 46	07▼ 26 46
13	11 25 45	02 17▼ 29 47	02 17▼ 29 47
14	06▼ 21 31▼ 51▼	05 29▼ 59	05 29▼ 59
15	01▼ 15 27 39 54	27 47	27 47
16	14 32 51	02▼ 17▼ 35 55	02▼ 17▼ 35 55
17	09 27 45	22 47▼	22 47▼
18	00 17 34 59	13 39	13 39
19	19 46▼	13 32 47	13 32 47

無印は始発バスです

▼ 小平営業所より

